

円成実性としての sad asac ca tattvam

葉 阿 月

瑜伽師地論卷第七⁽¹⁾と大乘莊嚴經論卷第四⁽²⁾、及び仏性論卷第二⁽³⁾において、特に真実義の解釈として三性説が述べられている。然し中辺分別論のように三性をもつてすべての真実を摂するところの根本真実であると称していない。そこで根本真実である三性の真実義⁽⁴⁾、即ち不顛倒義とはどんなことであるかについては、中辺分別論真実品第三偈における世観と安慧との註釈を中心とし、もつて仏性論と大乘莊嚴經論等の説と比較しつつ述べていきたいのであるが、紙幅の制限上、三性の中、特に円成実性の真実義、即ち sad asac ca tattvam (有と無との真実)につづて述べることにする⁽⁵⁾。

先ず中辺分別論 (madhyāntavibhagabhāṣya) 真実品、第三偈に

“svabhāvas trividhaḥ asac ca nityaṁ sac cāpy atattvataḥ/
sad-asat-tattvatāś ⁽⁶⁾ ceti svabhāva-traye isyate//” (三種の自性⁽⁷⁾
は、「[一]常に無である。[二]有であるが真実としてではない。
[三]真実としては有と無とである。」と云ふ[三]三種の自性

円成実性としての sad asac ca tattvam (葉)

において「真実義」が考えられる。

と述べている。即ち「常に無である」とは遍計所執性の真実義であり、「有であるが真実としてではない」とは依他性の真実義であり、「真実としては有と無とである」とは円成実性の真実義であることを意味している。然し、安慧はこの第三偈を註釈する前に次の如く有名な阿毘達磨經の二偈を引用しているのは最も注意すべき点である。

“māyādi-deśanā bhūte kalpitā nāsti-deśanā/
catur-vidha-viśudher tu pariniṣpanna-deśanā//

śuddhiḥ *prāpṛti-vāṇālyam* ālambanāṁ ca mārgatā⁽⁸⁾//

viśuddhānāṁ hi dharmānāṁ caturvidhagṛhītatvam//”

(生において幻等を説く所分別によりて無を説く。然し四種の清浄によりて円成実を説く。清浄とは本性と無垢と所縁と道とである。何となれば、清浄の諸法は[この]四種に攝せられるのである。)

この二偈は攝大乘論所知相分⁽⁹⁾にも引用されている。この中「生において幻等 (māyādi) を説く」ということは依他性の

円成実性としての sad asac ca tattvam (兼)

ことであり、「所分別によりて無(nāsti)を説く」ということは遍計所執性のことである。然し、円成実性に関する四種の清浄の中、特に本性清浄と無垢清浄は中辺分別論における円成実性としての sad asac ca tattvam (有と無との真実である)の意味に相当する。それは如何なる理由であるかはこれから論ずる重要な課題である。先ず世親が中辺分別論において、

「円成実の特質は有と無との真実である。というこのことが円成実性における真実である。」

と述べている。安慧はこれにたいしつ、

“sad asac ca tattvam pariniṣpanna-lakṣaṇam/

dṛvayābhāva-bhāvatīmakatvāt sattvam/

dṛvayābhāvātmakatvāt asattvam/ ca/visūddhyālabhanatvāt

tattvam etat pariniṣpanne svabhāve tattvam/”

(有と無との真実は円成実の特質である。〔それは即ち〕、「所取と能取との」二無の有(bhāva)を本質としているが故に有性(sattva)である。二無を本質としているが故に無性(asattva)である。清浄の所縁であるが故に真実である。これが円成実性における真実である。)

と註釈している。仏性論卷第二において、

「真実性体、有無皆真如之体、非有非無⁽⁸⁾故」

と述べている。大乘莊嚴經論述求品第四十一偈の釈に

「又円成実の特質は真如(tathatā)であり、そしてそれ〔真如〕

は実に一切法の遍計所執性の無性(abhāvata)である。又その無

性によって有であるが故に(bhāva)無性ではない。そして有と無とが等しい(bhāvābhāva-samānā)とは、その有と無とが別異でないからである⁽⁹⁾。」

と述べている。その他三性論偈の第十三偈にも円成実性における有と無との二相を述べている。

さて、上述の諸註釈文の中、仏性論は大乘莊嚴經論と同様に円成実性は真如であり、そして、それは非有非無、即ち有と無とが平等であると述べているが説明がない。然し大乘莊嚴經論では更に、円成実性(即ち真如)の無性とは一切諸法の遍計所執性の無性であると説明しているのは、安慧釈において“dṛvayābhāvātmakatvāt asattvam”即ち遍計所執性である所取と能取との二の無を本質とするが故に無性であると説明している主旨と一致している。なお無性でない(nābhāva)即ち有性(sattva)のことについて、大乘莊嚴經論では「無性によつて有であるから」と述べているのみで意味は明確でないが、安慧は“dṛvayābhāva-bhāvatīmakatvāt sattvam”即ち二無の有を本質とするが故に有性であると述べているから、この有性は依他性として述べている有性、即ち所取能取として顕現する乱があるという有性の意味ではなく、相品第十三偈において弥勒が主張している無の有(abhāvasya bhāva)即ち世親の“abhāva-svabhāva”(無の自性)という空性の特質を意味している⁽¹⁰⁾。

安慧は相品において、その無の有とは“*abhāvasyātmatvaṃ asativam*”⁽¹⁷⁾（無の本質が有性である）と註釈している。即ちその無の本質（*ātmatva*）という“*ātmatva*”が有性（*asativa*）であるというから、その“*ātmatva*”はFriedmannが“*background*”⁽¹⁸⁾と訳している意味の如く、それは弥勒の“*bhāva*”と世親の“*svabhāva*”の意味を含んでいるが、安慧はそこにおいて、その“*bhāva*”を明確に打出していない。ところがこの真実品における円成実性の有性について、安慧は明確にその“*bhāva*”を強く打出す為に“*dvaya**bhāva**-bhāva*”*śūnyatā*”（二無の有〔*bhāva*〕を本質としているが故に有性である）と註釈している。故に、真実品における円成実性の無性（*asatva*）とは二取の無を本質としている二の無という空の自性であるにたいして、円成実性の有性（*sattva*）とは二取の無の有を本質としている無の有という空の自性を積極的に表面化した性格のものであるといえるのである。

さて、その二無の有（*bhāva*）という“*bhāva*”は何を意味しているのか、安慧はここにおいて特に何を示したい為に、相品第十三偈の場合よりもその“*bhāva*”を明確に記入しているのかを探究する必要がある。先ず円成実性の無性（*asatva*）の説明である“*dvaya**bhāva**-śūnyatā*”について考察してみると、その中の“*dvaya**bhāva***”とは所取と能取との二取の無、又は人と法との二空のこと、或は煩惱と所知との二

障を離れたことをいう。そこでその二の無を本質とする（*ātmakatva*）というその“*ātmakatva*”とは何であるか、勿論それは兎角のような二の無という頑空、或は独在相（*svatantrya*）という本質を意味するのではないが、然し“*bhāvarūpalakṣaṇa*”⁽¹⁹⁾を意味するものでもない。寧ろ、仏性論卷第二⁽²⁰⁾及び成唯識論卷第八に述べている「二空所顯真如為性」、即ち人法、或は二取にたいする執着がない空性によつて顯われた真如を性質とするものである。故に円成実性の無性である“*dvaya**bhāva**-śūnyatā*”とは二の無という空性によつて顯われた真如を本質としているといえるのであるが、それを無性（*asatva*）というのは、そこに煩惱我執がないことを意味するのである。

これにたいして円成実性の有性（*sattva*）の説明である“*dvaya**bhāva**-bhāva*”*śūnyatā*”ということは、勿論上述の空性の真如を本質とする無性の意味を含めると共に、更にその無性の“*bhāva*”を本質とすることを積極的に表面化した性格である。言換えれば無の有という空性、即ち真如の“*bhāva*”を本質としていることを示しているといえるのである。然らば、ここでいう真如の“*bhāva*”とは何を意味しているのであるかについて探究する必要がある。

1)：“*bhāva*”の語義について

A) Monier-Williams : Sanskrit-English Dictionary p. 754

正覚集卷ノ一ノ六 sad asac ca tattvam (釋)

に existing, appearance, state, condition, nature, character
.....

B) 荻原雲来編：梵和大辞典, p. 956 漢訳として, 有, 有性
.....本・性・法・体・物体・物・事.....

2) “bhāva” の同義語の用例について,

A) bhava→vastu→tathatā (真如)

イ) ⁽¹⁰⁾ ṭikā. p. 121³⁴ “karmakleśa it/le ca vasturūpatvāt
paratantrasvabhāvaḥ.....” 同じ p. 122³¹³ “paratantra-
sya parijñāne prahāne ca.....karmakleśasyor bhāvātma-
tvāt prahātavyaś ca” o こゝにおいて安慧は “vasturūpa-
tvāt” を “bhāvātmatvāt” に用いていることが知られる,
故に “bhāva” に “vastu” の意味がある。

ロ) ⁽¹⁰⁾ Bhāṣya. p. 42-43. “yathāyogam pañca vastūny āra-
bhya nimitta-vikalpaḥ.....nāmarā.....tathatā-samya-
gñānayoḥ parinispānena svabhavena saṁgrahaḥ” o
こゝにおいて, 相, 分別, 名, 真如, 正智の五種を世親は
五事 (pañcavastūni) と称しているから, tathatā (真如)
も “vastu” の一種であることを意味している。

B) : bhava→svabhava→prakṛti→tathatā (真如)

イ) : Bhāṣya p. 22-23. 相品第十三偈の前半に
“dvayābhāvō hy abhāvasya bhavaḥ śūnyasya lakṣa-
naṁ” 世親はその “abhāvasya bhavaḥ” を “abhāva-sva-
bhavaḥ” と註釈していることによつて, “bhāva” とは

“svabhāva” の同義語である。

ロ) : Ṭikā p. 118²⁰ “tasmāt prakṛtiḥ eva svabhāva evāsya
śūnyatā”, こゝにおいて安慧は “prakṛti” を “svabhāva”
の同義語として用いている。以下へ) —ホ) まではこれと
似た用例である。

ハ) : Prajñākaramai, Bodhicaryāvatāra-pañjikā, ed. Po-
ussin, Bibliotheca Indica, Asiatic Society p. 524
“ato smāt karaṇāt sattvaḥ prāṇaḥ prakṛtya svabhā-
vena parinirvṛtāḥ paṁmuka-svabhāvaḥ.....”

ニ) : Laṅkāvatārasūtra, Nanjio 本, p. 44⁴⁶

“katamais caturbhir yaduta svacitta-dṛśya-grahaṇā.....
viñāna-prakṛti-svabhava vicittarūpalakṣaṇa.....” 識

本性如是故 (大乘入楞伽經卷二大正16. p. 594中)

ホ) Böhtlingk: Sanskṛti Wörterbuch p. 907 左

prakṛti=svabhava

ヘ) Ṭikā p. 122¹² “prakṛti iti tathatā/prakṛtiprabhāsa-
ratvāc cittasyeti/aras tathatālambanād yo nirodhaḥ sa
prakṛti-nirodha ity ucyate”

こゝにおいて安慧が prakṛti を tathatā (真如) と称して
いるのは, 心の本性は清浄であるからと見ている。

ト) Laṅkāvatāra-sūtra. Nanjio 本 p. 228¹²¹⁴

“tattvaṁ bhūtaṁ niścayo niṣṭhā prakṛtiḥ svabhavo
‘nupalabdhiḥ tathatā-lakṣaṇam” こゝにおいて “prakṛti”
は tathatā (真如) の特質の一種として見えている。

以上述べた“bhava”の語義及び同義語の用例から見て、“bhāva”は“vastu”と同じく“tathatā”（真如）の意味があり、又“svabhāva”と同じく“prakṛti”及び“tathatā”の意味がある。言換えれば“tathatā”（真如）の“bhāva”は“vastu”であり、svabhāva であり、prakṛti でもあるといえるのである。

次に tathatā（真如）そのものの性質の解釈について以下の諸論書に述べている説明を見ることが出来る。

仏地経論卷第七に

「経曰、一切法真如、二障清淨相。

論曰、有義此顯清淨界、謂一切法空無我性所顯真如。永離二障本性清淨、今復離染能為一切善法所依、是故說名清淨法界。

一切法者、謂世、出世、有漏、無漏、蘊、界、処等。真如即是諸法実性。無顛倒性与一切法不二不異、体唯一味……。」

と述べている。これと似た文意は大乗莊嚴経論菩提品にも見られる。要するに一切法の真如とは一切法の空無我性から顯われた真如、即ち二障を離れた本性清淨であり、又清淨法界でもある。これは又空性の意味であり、又転依の意味であるが無垢真如のことを示しているといえる。然し、仏地経論では更に真如は一切諸法と不二不異である諸法の实性でもあると述べているのは有垢真如の意味を示している。このような真如の性質は宝性論の如来藏品第一四八偈の釈文に

「心は無辺の煩惱と苦の法に随伴せられても自性清淨をもって (prakṛti-prabhāsavarataya) は、変化 (vikāra) とは言われなから、この故に、正真なる金の如く不變異性 (ananyathā) の義に よつ、真如 (tathatā) と称せられる。そして一切の邪定 (mithyāva-niyata) 相續の衆生の自性とも無差別なものが、一切の客塵垢 (agantukamala) から清淨に至つたのを如来 (tathāgata) と称するのである。この如くに一の金の実例をもつて、真如の遍満する義に關して、真如 (tathatā) は如来 (tathāgata) であり、これらの衆生の胎免 (garbha、藏) であると明かにせられたのである。」

と述べている。要点を言えば、真如とは自性清淨心であり、それには客塵煩惱に随伴せられても変化しない真如、即ち有垢真如 (samaratathatā) である如来藏 (tathāgata-garba) と、その客塵煩惱を離れた真如、即ち無垢真如 (nirmala-tathatā) である如来の法身という二種の意味を示しているのである。その中、有垢真如は、勿論、世俗諦において常に客塵煩惱に附隨されている本性清淨である真如であり、又安慧の “diva-yābhāva-bhāvātmacakva” 即ち一無の空性である真如の “bhāva” を意味しているといえるのである。故にその意味を換言すれば、真如の “bhāva” とは本性清淨心であり、それが清淨世間の後得智によりて、世間に働く場合には、常に客塵煩惱に随伴されている状態にあるので、これを有垢真

如、或は如来蔵とも称するのであり、又、仏地経論に述べている一切諸法と不一不異である諸法の実性である真如の意味に相当するのである。

ここにおいて、円成実性の有性(sattva)は有垢真如に相当するとすれば、その無性は無垢真如に相当するともいえるのである。又前に述べた阿毘達磨經の偈文に示している円成実性の四種清淨の中の本性清淨と無垢清淨に相当する意味であると説明されると思うのである。というのは成唯識論と攝大乘論釈において本性清淨を有垢真如の意味、又無垢清淨を無垢真如の意味に解釈している。殊に攝大乘論釈では更にその思想は又大乘莊嚴經論、述求品第十三偈と、真実品第一偈においても見出されるのであるが、殊に菩提品第三十七偈において等しく如来蔵を述べている。⁽²³⁾となく、如来蔵という名称は中辺分別論には出ていない。又三性の真実義を述べている上述述求品と真実品においても述べていない。然し、大乘莊嚴經論の真実品に、非有と非無等の五種の不二の義をもつてすべての第一義を説明しているにしても、前二種の不二の義は三性の説明であるのにならして、後の三種は法界の無為性に関する本性清淨と無垢清淨の説明である。又述求品の第十三偈の前半に三性説を説明しているにたいして、後半に本性清淨を説明している点から見れば、大乘莊嚴經論の真実品及

び述求品に述べている真実義は、上述阿毘達磨經の偈文の意味を根底として發揮した根本真実としての三性説であるといえるのである。然し、中辺分別論の真実品において、正式に三性を根本真実としているにもかかわらず、円成実性としてのsad asac ca tattvam (有と無との真実)について本性清淨と無垢清淨を述べていないのは何故であるか、これは相品における円成実性である空性の説明について、すでにその第二十二偈において心性清淨と客塵煩惱⁽²⁴⁾のことを述べているから、真実品において、その心性清淨説が略されたのではないかと推察されるのである。然し、その代に大乘莊嚴經論よりも強く、明確に円成実性の真実義として有と無との真実を述べているのは特色である。勿論この有と無との真実とは虚妄分別(abhūtaparikalpa)と不二不異である空性という心性清淨説を根底としているのであり、又唯識説の特色である無の有(abhāvasya bhava)という空性の特質を表面化した円成実性の真実義であるといえるのである。十八空論において、中辺分別論の第十六「無性自性空」(abhava-svabhava-sūnyatā)に相当する第十七「有法無法空」に真実有と真実無⁽²⁵⁾と主張しているのも同じく無の有という空性の特質を根底とした円成実性の真実義を示しているといえるのである。

さて、このような空性の特質は、又虚妄分別と不二不異であるから、円成実性のみに有と無との二相があるだけでな

く、依他性と遍計所執性にもそれぞれ有と無との二相がある
と三性論偈の第一、一二、一三の三偈に述べている。たと
え、それら三性の各自に有と無との二相があるにしても、そ
れら三性は空性と不二不異である縁起性の虚妄分別に摂せら
れ、相互に密接な関係をもっている。即ち虚妄分別である依
他性に乱性が起れば、本来所取と能取との二取が無い境に二
取として分別するから、それら二取は分別せられたものであ
る。故に分別せられた二取は遍計所執性の有相であるにたい
して、その二取を分別する乱性は依他性の有相である。とい
うように、遍計所執性と依他性との有相は、同一雑染相の上
に現われた所分別と能分別の面から見て、遍計所執性の有相と
依他性の有相と名づけたのである。然し、本性清浄心の面か
ら見れば、それら雑染である二性の有相は常に真如である本
性清浄心に随伴している。たとえその本性清浄心は雑染せら
れないにしても、それらの雑染相に附随されているから、この
ような状態は清浄なる円成実性の有相、即ち sat tattvam (有
の真実) である有垢真如と称せられるのである。以上が三性
の有相にたいする相互の密接関係を述べたのである。

次に三性の無相とは、即ち遍計所執性における二取は本来
無いものであるから、その二取にたいする執着、或は分別を
離れば自然に二取の相がなくなるが故に、その無相を遍計所
執性の無相というのである。然し、この二取にたいする分別

がないというのは、即ち、能分別である識性の依他性に分別
が生起しないからである。故に分別を生じないことが依他性
における無相である。これは同一の清浄相における所分別の
無いことと、能分別の無いことについて、遍計所性の無相と
依他性の無相とを名づけたのである。そしてこのような二性
の無相、即ち三無性論^⑧という分別依他二性の無所有、或は転
識論^⑨という境識俱泯という空の真実性が、清浄なる円成実性
における客塵を離れた無相、即ち asat tattvam (無の真実) で
ある無垢真如と称せられるのである。これは前述の三性の有
相という世俗諦の雑染の面をいうのにたいして、今の三性の
無相は勝義諦の清浄の面について三性の相互の関係を述べた
のである。

然し三性の有相と無相は、たとえ、上述の如く三性の相互
間に密接な不二不異の関係があるにしても、三性の真実義に
おいて、遍計所執性の有相は認められない、というのは、そ
の有相は分別された妄執であるから、ただ無相だけが真実義
として認められるのである。又、依他性における乱性の働き
によつて、その有相は認められても、それは真実としては有
相でないことと否定される。故に「有であるが真実としてでは
ない」ということが依他性の真実義である。そこで、ただ円成
実性において有と無との二相が真実義として認められるので
ある。これは全く、空性である円成実性とは、真如という心

性清浄であると共に、客塵である虚妄分別の随伴と相離とを認めているから有と無との真実が平等に説明されるのである。かくして、円成実性にこのような特質がある故に、遍計所執性と依他性と密接な不一不異の關係を保ち、もつてそれら二性の真実義と共に、苦、集、滅、道の四諦等のすべての宇宙真理の根本真実となることができるのである。

- 1 瑜伽師地論卷第七三、撰決釈分中菩薩地之二、大正三〇、七〇三頁上「若欲知真実義者、於三自性復修修觀」と述べてゐる。こゝにおいて三性を真実義解了の対象としてゐる、この三性説に先行するものとして五相説(卷第七二)及び卷第三六に世間極成真実等の四種真実が真実義として述べてゐる大正三〇、四八六頁中——例、山口益博士・中辺分別論釈疏一七四頁(註一) 大乘莊嚴經論卷第四、述求品「法の真実 (tattva) [義] を求めるに關する二偈」即ち漢訳第十一、十二偈、大正三一、六一一頁上——中、梵文 Mahāyānasūtrālamkāra (Lévi 本) 五八頁、第十三、十四偈、
- 3 仏性論卷第二顯体分第三中三性品第二大正三一、七九四頁下、Madhyāntavibhāga-tīkā (山口本) 以下、Tīkā を略す) p. 113⁸ “aviparītartho 'tra tattvārtha iti darśayati”
- 5 Madhyāntavibhāga-bhāṣya 三八頁に円成実性の真実義にのぞく “sad-asat-tattvataś” と述べてゐるが、Tīkā p. 113⁸ にのぞく “sad-asat-tattvam” 或は “sad asac ca tattvam” と述べてゐる。真諦と玄奘は共に「有無真実」と訳してゐる。
- 6 Tīkā 111頁、この偈文の ālambanam ca mārgatā

caturvidhagṛhiṭatvam は Pandeya 本 p. 85 にのぞく mārgatālambanam tatā va caturdhā gṛhaṇammatam となつてゐる。この阿毘達磨經 (abhidharma-sūtra) の偈文は撰大乘論本卷中、所知相分第三、大正三一、一四〇頁中 [玄] 訳、「幻等説於生、説無計所執、若説四清浄、是謂円成実、自性與離垢清浄道所縁、一切清浄法、皆四相所攝」佐々木四二頁において余の諸本にもこの偈文が引用されてゐる。

- 7 Tīkā p. 113¹⁸⁻²¹
- 8 前掲 Mahāyānasūtrālamkāra. p. 65 字井、「大乘莊嚴經論の研究」二二二頁、例、山口益、「世親造三性論偈の梵藏本及びその註釈的研究」宗教研究新第八卷第三号、九三頁。
- 9 “advayatvena yac cāsti dvayasyābhāva eva ca/ svabhāvas tena nispannaḥ sad-asat-lakṣaṇo mataḥ//”⁷¹⁸ mukhopadhyaya: The Trisvabhāvanirdeśa of Vasubandhu p. 3.
- 10 Madhyāntavibhāga-bhāṣya p. 22-23.
- 11 Tīkā p. 471-2
- 12 Friedmann: “Madhyāntavibhāgatīkā” 英訳本六二頁。
- 13 Tīkā p. 47⁸ 安慧は世親の無の自性 (abhāva-svabhāva) は空性の相を顯わすといふことになつてゐる、それは “na bhāvarūpa-lakṣaṇa” (物の体相ではない) と註釈し、更に無 (abhāva) のこの声は “bhāva” を遮する語であるから “bhāva” という声がなくともその義は了解される、故にこゝに “bhāva” の声は附加 [言] である。そして、若しこゝの “bhāva” の附加言がないならば、dvayābhāva (二の無) を空性の相のみと説くべきで、śāśaviśānābhāvaavat (見角の無の如く) 二無

の svāntarya (独在相) のみに解了せられるという意味を註釈してゐる。

14 仏性論卷第二、大正三一、七九四頁上。

15 成唯識論卷第八大正三一、四六頁中、新導本三七二頁、又同じ四四一頁に十真如の第一遍行真如について「謂此真如、二空所顯、無有一法而不在故」と述べているのも同じ意味である。

16 Tīkā ḥ madhyāntavibhāgikā (山口本)、Bhāṣya ḥ madhyāntavibhāgabhāṣya (長尾本) の略称である。

17 Pañca vastūni を五事と訳している論は瑜伽師地論卷第七二・七三、顯揚聖教論卷第一六、(大正三一、五五七頁中—下) 成唯識論卷第八、(新導本三七五頁)、及び窺基の成唯識論述記卷第九本、(大正四三、五四九頁中)とであるが、Laṅkāvatāra-sūtra (南条本) 二二七頁—二二九頁におう「pañca dharmā」(五法) と称している、漢訳の「五法」を用いている論は大乗入楞伽經 (大正一六、六二〇—)、入楞伽經卷第七 (大正一六、五五七頁中—五五八頁上) の外に仏性論卷第二 (大正三一、七九四頁中—下)、瑜伽師地論卷第七四 (大正三〇、七〇四下)、顯揚聖教論卷第六 (大正三一、五〇七上) とであるが、その外三無性論卷上には「五藏」(大正三一、八六八頁上)、字井、印度哲学研究Ⅴ、(二二二頁) と訳している。転論に「五法藏」と称している。例、字井、印度哲学研究Ⅴ、四二二頁、なお、それら五種の名称の順序は大体、相、名、分別、真如、正智となっているが、論説によって変動がある。これに関する詳細のことは他の機会に譲る。

18 玄奘訳親光菩薩造、仏地經論卷第七大正二六、三二二頁下—

円成実性としての sad asac ca tattvam (葉)

三二三頁上、なお經曰「一切法真如、二障清淨相」の偈文は仏地經の最後に述べている偈文である、大正一六、七二三頁中。

19 mahāyānasūtrālaṅkāra p. 44. 第五十六偈、

“sarvadharmā-dvayāvāra-tathatā-suddhi-lakṣaṇaḥ/
vastu-jñāna-tad ālamba-vaśīṭakṣaya-lakṣaṇaḥ// 漢訳大乗莊嚴經論卷第三、菩提品、第五十偈、大正三一、六〇六頁上、字井、大乗莊嚴經論研究一六三頁。

20 親光菩薩はここにおいて、真如とは転依であると称しているが、安慧はそれに対して、真如とは転依であり又空性であると註釈している、例、西尾京雄：仏地經論之研究、二六四頁註三、勿論、戒賢は「一切法の無顛倒の自性、真実と空性 (ston pa ṅed) をいふ」とおう「一切法の真如 (de bshin ṅid) にも」を述べて、更に「bdis ni de bshin ṅid gnas yōns su gyur pa bstan te」(此によつて真如は転依であることを示している) と述べてゐる。チベット訳北京版 No. 5498. 329b-4 瑜伽師地論卷第八十 (大正三〇、七四七頁下) において転依とは真如清淨所顯 (tathatā-viśuddhi-prabhāvita) 真如種性 (tathatā-gotraka) 真如種子 (tathatā-bījaka) 真如集成 (tathatā-samudgata) を述べてゐる cf. Lambert Schmithausen: Der Nirvāṇa-Abschnitt in Der Viṃśatyasamgrahapī Der yogācārbumi p. 44. 45. とかく真如を転依のことに解釈しようとするのは唯識説の特色のみでなく、その他宝性論 Johnston Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra p. 79. 中村瑞隆、究竟一乘宝性論研究一五五頁、字井伯寿宝性論研究五九三頁にも見られる。

円成実性といふ *sad asac ca tattvam* (蕤)

21 Johnston: 前掲本 p. 71 中村本¹ 一三九頁、宇井本²、五八三頁。

22 同上、三宝品、Johnston 本¹ 二二頁、中村本²、三九頁、宇井本³ 五二三頁、*"tatra samalā tathatā yo dhātur avinimukta-kleśa-kośas tathagata-garbhā ity ucyate"*

23 成唯識論卷第十、大正三一、五五頁中、新導本四四七頁、撰大乘論釈は玄奘訳、世親釈と無性訳との二本、及び、真諦訳と笈多訳の世親訳の二本において等しく如来蔵を述べている(大正三一、一九一頁下、二九〇頁中、三四四頁上、四〇六中)。例、拙作「中迅分別論における三性説」東方学第四十輯、一一九頁註、五三、五五、そのチベット訳、北京版 No. 5551, 180a⁷ におつても如来蔵 (*de bzin gśeegs paḥi snin po can*) が述べてある。

24 *Mahāvānasūtrāṅkāra* p. 58. 述求品第十三偈、宇井本二〇一—二三頁、後半偈の中に *"……atho viśodhyan amalaṁ yac ca prakṛtyā mataṁ yasyākāśa-svarūpa-vāri-saḍṣī kleśadvīṣuddhir matā"* と云ふやうに本性上の清浄を述べている文は漢訳の偈文にないが、長行においてその文意が述べられているから一致している(大正三一、六一一頁上)。真実品第一偈、梵本二二頁、宇井本一〇四頁、大正三一、五九八中。

25 同上四〇頁、宇井本一五三頁、大正三一、六〇四下(梵、第三十七偈) *"sarveṣāṁ aviśiṣṭāpi tathatā śuddhim āgataḥ tathagatatvaṁ tasmāc ca tad garbhāḥ sarvadehinah"* 釈文におつて明確に一切衆生は如来蔵 (*sarve sattvas tathā-gatagarbhā*) にあると述べている。

26 *Bhāṣya* p. 27. 相品第二十二偈の後半に *"prakṛtyāiva prabhāsvatvāc cittasya/kleśasyāganutakatvatāḥ"* と述べてゐる、その中 *"prakṛtyāiva"* は世親訳である。殊に *Tika* p. 61²⁵ におつて、その後半の偈文は殆んど世親訳の文として述べている、然し、漢訳は何れも弥勒の偈文としてゐる。

27 「弥勒によると、真実は、真如をも意味するが、単に真如のみでなく、虚妄なものをも意味している……」例、上田義文：*「大乘仏教思想の根本構造」* 一〇七頁。

28 十八空論、宇井：印度哲学研究Ⅵ一四六頁。真諦が中辺分別論相品第五偈の長行における真実性の説明にたいして、更に「真実有無」という増補文を付けているのも同じ主旨であると推察される、例、山口益・漢藏対照弁中辺論七頁。

29 三無性論、宇井、印度哲学研究Ⅵ二〇九、大正三一、八七二頁上、仏性論卷第二、大正三一、七九四中「問曰、真実性、縁何因得成、答曰、由分別依他二性極無所有故得顯現」例、上田義文・仏教思想史研研三八頁—三九頁。

30 転識論、宇井・印度哲学研究Ⅵ四一七頁—四一八頁、大正三一、六二頁下「此境識俱泯即是実性、実性即是阿摩羅識」三無性論に分別性と依他性との無所有を阿摩羅識と称している、(前掲、印度哲学研究Ⅵ二四五頁) 勿論、この阿摩羅識は前述(前掲本二〇九頁)において分別依他両性の無所有を法の如と称しているのと一致してゐる、故に阿摩羅識を無垢真如と見ることが出来る。然し、十八空論、(前掲、印度哲学研究Ⅵ一四八頁)においては「阿摩羅識是自性清浄心、但為客塵所汚故名不浄、為客塵尽故立為浄」と述べたから、有垢真如とも見られる。